●序章●――7
はじめに――8
第一節●研究課題の設定――10
一　ミクロ的な研究視点―「義」および「シンボリック相互作用」――10
二　マクロ的な研究視点―「社会劇」としての運動過程――13
三　研究の意義――16
第二節●若干の概念規定および分析の視点――18
一　「自殺」と「他殺」――18
二　「民衆」と「知識人」――24
三　「冤魂」と「烈士」――29
四　「怨」と「恨―恨解き」――36

第一部●《烈士》の誕生と生成過程——41

第一章　《烈士》の誕生（一九七〇年代）—全泰壹の生と死をめぐって——42

第一節●「韓国のイエス」＝全泰壹にみる《烈士》のモデル——42

一　なぜ、〝全泰壹〟なのか——42

二　全泰壹の死の波紋——46

第二節●全泰壹のライフヒストリーと社会・文化的背景——54

一　幼少年時代——55

二　放浪時代——60

三　労働者時代——65

第三節●神話的な〈語り〉を通した《烈士》モデルの形成過程——84

一　全泰壹の描いた全泰壹——84

二　李小仙の描いた全泰壹——105

三　趙英来の描いた全泰壹——118

第四節●神話としての『全泰壹評伝』とその社会的背景——135

一　殉教者モデルの形成——135

二　社会との相互作用関係——139

三　全泰壹事件に前後する社会的な背景——146

第二章　《烈士》の生成過程（一九八〇年代）——150

第一節●一九八〇年代の民衆運動——150

第二節●画期としての「一九八六年」—フィリピン「二月革命」の影響力——156

一　フィリピン「二月革命」を取り巻く韓国の社会状況——156

二　フィリピン「二月革命」をめぐる神話的な〈語り〉——159

三　小括——185

第三節●死の受容と意味付与の過程——189

一　《烈士》をめぐる〈公状況〉の形成——189

二　死者における「象徴的不死」の獲得——191

三　生者による「象徴的不死」の代行作業——220

第二部●《烈士》の遺族たちによる運動圏への参与過程 227
第一章　李小仙にみる母親のモデル（一九七〇年代） 228
第一節●「不孝」をめぐる価値逆転のプロセス 228
第二節●李小仙の示した母親のモデル―『オモニの道』 232
一　悲哀をめぐる三つの過程 233
二　木曜祈禱会と人革党事件をめぐって 247
第二章　「遺家協」と遺された親たち（一九八〇年代） 254
第一節●「遺家協」の概要 254
第二節●遺された親たちの事例 263
一　金鍾泰の母親の場合 263
二　朴永鎮の父親の場合 281
三　朴鍾哲の両親の場合 285
四　李錫圭の母親の場合 303
五　姜慶大の母親の場合 306
第三節●遺された親たちにおける「悲哀の作業」 316
一　悲哀をめぐる心理過程―「怨」から「恨」へ 316
二　哀悼の形式と儀礼の装置 328
三　悲哀をめぐる社会過程―遺志の社会化へ 336
●終章● 339
要約と展望 340
註 356
参考文献・資料 390